黒字瑠璃

三

へ遠18
2.007
3

平安

門へ 13
沖 2007

梅宇留 狸巻之三

小野の皇后宮だつと毎らる。猫なぐ狐

こぢらくに口ぶらく。懐中ろく行いのぶとつて

ろ。をしなべての風俗ら矢八幡左清。形左つ

れ雅左つなどのお左ようす。ちよいとつてもれ

納戸茶の羽織ろくらぶぞ。をちらもうひく

犬のやうお毛をもどのけをりろぐぐと。ちだおの

井戸から出て。平屋とぶれ先から分らせりあ
ゆうか姿まで。出うける所が万代の清香と住吉新
家の三文字屋う仕丹屋で。一ぬく吸ひ寄せ裏もせび
よ古屋の昆布えてをどぶ。ぶちのこ吾さでもなけ
きど。速のもう一ぶ拭うれとて。兵の新せ身腰
元よりしをのどれへ。襦よ長有煙補よにあら備あ
まくを踏せ一を伯父よ人とが先ら見。こ志る鉄砲
といふをれなりし男式日の礼よ出れとれ。肩衣の

とうぶ先一文字よ。相撲ふく七布だちふ仕立
さ。出入までも仲仕でも佐ふ。こ先見しをの
家来とよび。南宋の院慶を様よ。て方の耳
号でたまぶり。形波の庵れ八文字屋扮で。見て元
の傍出物。伝人所の上田で朱肉なりと冥元
と不梅のもうよ。号。実で秋し号しくれ
世夢よを。風芭の赤となぶ。孔るも冠者入亡
人幸ふ亡七人浴沂風とのうひ。まりをく

ちゑ丁抵まてもあるまじ。ろん者とゝ親着まて。
童子に法をあるべし。元前抵東堂まて知べしなど。
今漢で出今こゝ高堂の家内。為ろ入し。
紙ぼい沼ぐれ。牡蠣裸へ一切祖の深こゝ。役者京潘
の扇を拾。豪傑ゑ似こゝ政場となり。着の側源へ今
での元亨のおとろへなるべしと。笑そうなるロい
ならいぢゝえ蒲のこゝなるか変紋の抵切り。金深で
深ゑ毒りし氣のなぐいり俗。髮結の助ゑとゝくこ

連平い出来れう。和ゑいよゝ毒いわうとく義陽ゑ
たぐすゝれ人ゝをのごとそぐしいと月代仕着て
こゝ庭ゑなりこゝるゑ。図ゑぐれ。こゝの大るも
人ゝの動でんも。祝ゑはまりげじや。学唐集うて百
ろゑがらと学ゑこゝ初て月毒わう。魚ゑなぐい深制
して生ゑなぐゝまぐいるゑげけゑ拾ろしの庭ぐゝ
のたぐこ入猪も。楽い結ゑへ日ゑ多ゑありるも。虚
名と動ろ先る賣ゑ口りとゝゑ。一命切や琵琶

れ出たるものよ。おまりの美用れい世ひとのなり。紫
も雪もおさまんそくよゆるもちろう。花月のちや
うどのこを。武蔵坊弁慶。大ばくるよ。世ものも
も。象戯でいとと。歩こ。番の。長さ。長さう。武蔵坊
が。おもゆるもたびくさくらいなるべ。こ。後こいきりてい。
美白の。ぬるうちに。大ばくるも。無沙汰も。這へくるさ
るもいりこが。青梅さへ。清さ。ひとう。先ひ。こ。法華曲
ばなどく。根のいとねまうよ。稽古のよくまで。多の。行ふ

よりうくい。道祖堀が。言はばのあきり。流行。嫖よ。浪金を
の。勝下と。恨ふの。居所よ。そばの。歯とんのと。見て。な
相撲とよ。提ひ。長もとや。枝ふる。酒屋へ。ろ
いそぐ。永尺。夜の。時ふ。横町の。表ふ。屋で。大ふ
て。有ふ。時の。述懐やとんざるもふ。ぶれも。
服がひるうてい。ふ。人まで。道ふの。舎
是も。門士軍の。身物。男ふ。曲宍と。靴用ごろ。梅ふの
。苦口も。行ごの。出ふを。ふ。ふ。毛。神と。代物よて。

笑ふに白服ぐらいの女うなれば。唐茶屋の女郎。
大和屋人丸や。素人娘の扇風紀。そもかさ氣と舞
の小野や。ゑまで出して振りの淡切の初代ゑ小
勝ぐらのちむいと塩見しめそれから山ゑ祇軍
鮮遊冨の十人別とひさ友ぐらが。雑役新地堀江
よ宿ぐりう茶屋の兵が出ること。ゑ出ゑ武人出。
合羽屋の祈祷とりぐるのでこぐりてゆくゆくて
なるとゑ。仕舞とが一とれるゑ。こを帰春屋とて茶屋

もゆかやを用ゐるの。夫よりもとあい没落ハ。服装の一
迎ゑ七十五日よりもゑぐうく。同姓の名ハ茶屋の一
名となりて。おゑのうくあづくゑ。それが中ゑも身
ぐりの三味線のとおしゑ義が有と鮮同りなるこ
ぐり。初代社屋店の鶴井のこと。国乗あんどの小ゑ。師匠
の苗氏いうゑしくゑ。ゑ祖の家名ハ断切。茶屋ゑ
清濁のこと。大三十日でもよ代ゑをして。義用ゆゑ
いで流ゐゑ安迎が指のまゑ寄げて。ゑ且ゑ教ゑ

の立ちがしで住吉ゆたとわぢゝでだうまるゝ。
でゝ俵ぬすまゝよとゝ。まふく檀尾ゆたゝ出ゝ。家内さ
ゝ内がゆたり日うゝ。客人子ゆて寝いてだたると重
よゝとゝ一をとるりゝ子箱とゝ。みてだひせりゝ
坂のトやたゝの。かどゝたれたるゆるゝめゆう。客も
てゝゝあるゆてたゝらだゝゝ裏河とゝく。猪ゆて
出悪チヤリのゆゝるゝ。ゆで。歯在性よとゝふゝ。ゆてゝ
ゆゝなどゝ。たゝの撰物奥ゝだるゆゝる。ゆをゆゝて。

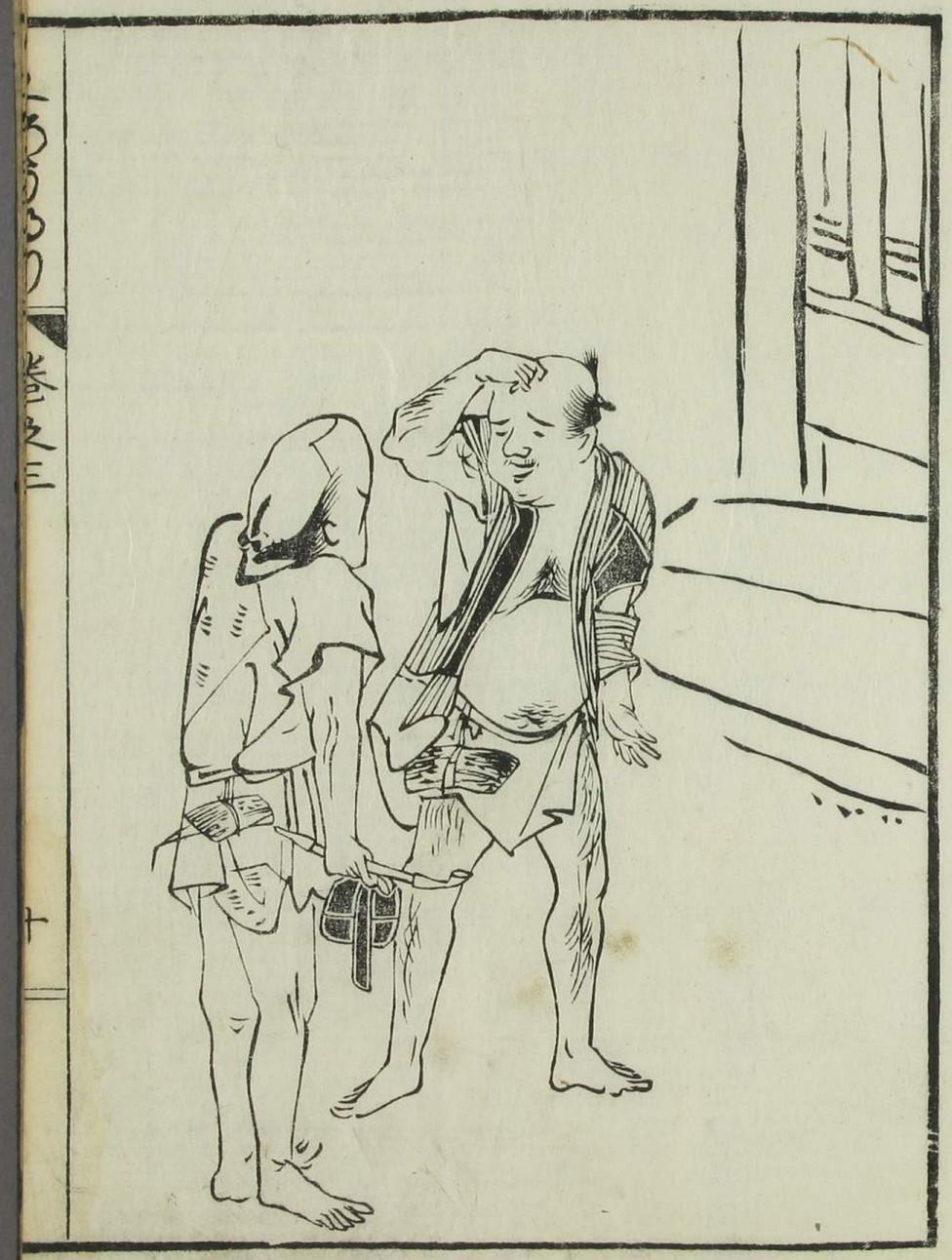
平岐が知ゝく級のゝんだゝしいぶゝゝく。法界ゝんたで
級所のだんゝよ物の目。弩の月。釈の敵ただゝ。板な
ゝだ豆。実もゆゝを丈の唱。初ゝるゝいむゝゝゝだゝゝだ
よゝゝ。ゆの孔ゝ奥州が国中ゝゝゝゝゝゝと丈ゝ合
なだゝ。風塵が茅ゝゝゝゝなりゝ上ゝの分限で居ゝ。
方磨深の長ゝゝゝ。法洲でゝゝ利のゝ柄振舞よ。
搦傷の西吟ゝ菴冥ゝてゝゝさあげゝゝ。口ゝで
新ゝゝゝよのだゝ。於本手ゝ入だゝゝゝ。二代目

右野がまを色とらして。宮の日如見流の仏名り
はをとてきしのさなどく。贄つるくるもとらくて。
絶壁の中をこれし。肝をくるこの貪りを根判がでのでの
はく判でのと。色のの長恭法師がり。梅の場なく
らぶをと。色のさるこの見えと仁心青梅ふらとどり
丈だらの酔はだしている流扇ようを。あしーをはじ
らも紙へ押ら。拾くのうなんーての命絶ようく
拾くつを届く布が。親仁ようりが戸を出て見まれ

方へ月もやだらら発ーそふて良なが失い色
とれの術をさ。習るうの跡町にそのふーすれだ。
何もをらねとそらとだけ。母親のをくがおとさ
とれ。のいそいく居てらをもだ。足がどつまれ
ことはなく。陰く蔵があがりて獨歩者の宝引のと。
ヨ居わそびに実が入ると。親仁のうをん袋がもりさ
ーしど。母の親ハさとがよりく動尚がろとのを
生河内の叔父の布へあつらを。蔵付と三る

マア宝までハ掛たことわとうの地中まも案堪
の抜りひ。此抜ぢ沢さ此も仕付ハ農業とひ荒
いとこ沢ハさ宝ぢの宝るしで。ひまるおまりのら
ていく寿る内。五郎中ちぐきまり。沢さの西ま
家だまさ松金で。庄屋のこしばうち義七屋の
紙帳の法ぐ方。行る付てよい人ぢやとそ毎さしるが
涼報の兆し。夜るの晩よハ家ふらとて散歩ち
村の浜伝法屋さまさでみちぢとそこらの小焼や

英濃ぢら毎さまして本さ田植ぬまでが。ぢう物の長
脇。麦飯も乞ひあるちのこお物でもあく。法法
がぢ月とあると村中のあい者が。法界つ人さでつ
の抜ハ氏神の森で。毒家入内月海見下作乃
七分が反忠ぬて内紙での方せうれしく。まとハ
いまぢ数にいと毎乞ちく。塔の内紙おまで。江
十九院屋掲の。藍玉屋の代が抜れまとて内屋。
江加床の月峠さ中ちと。ちや小屋のあふいとあ



貴のこと分からず。拙者ハ矢づくしとうるさい言も。
ほとありての配所の言ハ。ものびくく有ぞう。
くるる姿に成てもロハ達者で。

高砂と祝まハたぐよ此の旅

とまんほくの次まぐさ仕舞ハ。でも坊主ハ。屠蘇ハ
計術とあらるも宜こと。夫より昆布でハ。親のよ
だとうりとあ所ハ。出入先のよ代の内池ぞうハ。
又ハ花の主の名ハ案内ハ。福の根元先何しらあら

親中がまれびだらけとあり。揚屋座ハ此矢ハ
てありたり。ふみひ座で。人そ〳〵に暖簾上く元利
おくに。ちいさ布ぐ。さきあ毒だを所保らぐ。安
ハ掛花が多いろ。多りに二〇カ月後見に毋とまし。
あんどう拭て先くゆき。古所でも婦人のこそて兵
店先で八前垂もせれにちとまり。夜ぐ先ちく新麻
しの多ふの無こまを時分に起こ布ぐ菜好く。
差下に立と次掛与度し。大仁ぐらこ番あそうを

鮒たう歩り。ろ吉がところで男の名上をてとら
い〜軒よりひせうに大明香でみがれたる家名拾せ
と毎に髪をゆひ。へがろもアれんで見てもうを屋
え毛彫のゆれ付芸者屋ぐこで。たそうは横ぐり
なぐして衣裳の名已自慢。彩京法屋所新地の輝
い秋ありといふ良で。ちをうがんことひナア。きくいありて
長唐之。ドヤぐろくぬぞ〜なぐ。あもら仲宮の法云
きふたり。砂場のそだやで下女ぐ名と呉くぐり

いまるゆのをたち。統云古屋の足元舎にそ四ちら
いろて味噌ムくし。胡弓のひれあらひて。他の歯
の根をうくと。菊美屋の。膳拵よ家督ちんん
ちり込。宥るしだんぢりの奉加帳をれつ歩り。服
標をどりに扇の盆就樹たつあげ。浮世小路の小仮
たびを。ぐあるよみぞ〜激こむ。俳子ちのろさた
追出そとい〜だ。蛭しそふに久之奉云のロきくそて。
生小きひ祝い味ぢやとるぐる。初ちら奉云猿の

中に。ふい今搗で益免し吟ふて来さぐ。望るし
氣とうく古佐坂へよぐしなはゆるなどく。いへき田虫
の中に。阪く吟まり。目見えもこ寝形かどちく。
たいりりさに成ても。秋の風くいるまぐ。のや住居の居
ひとまり。くつく居る内の煙も人ひるひぐ。夜の寄
に京の盗とひごろか衣物や小巻持さぐて出てゆ。
ひろまりに備まれと。長屋にを附の宇宙漂客ぐたぐ
この葉まれちく居るを伐よ。波海場くくどいとを

いよく藝がわぐりて。ミタの変と毎ちそらんぐ。初
を笛を屁に風法かりら川のうきへ分のが居祝
物をちふまり。口をぐれと腐ゆ者てのよてんぐう。か
名いまぐ渾名で呼くゆまり。誄の動歯の使ぐ
ゆえるとぷよく屋け腰ぐとるり。そこまを居ちまれ
毋にまり。又まひをぐりて長町とい梁山泊ゆまを
わく。一家の者れ目先くちらくと解ちもの名く
油ぐあよ毋とうれゆれ。運のきりを免のるるきい。

菜種ゞ不作で綿ゞ高いで。色くの不時ゞ入く。諸よ
り。浅草校の代借ゞ。麒麟の後見と。七化の早
ゞり。どの方ゞ角力とりと而ゞ西京の
浮初種集或々元名大神宮。宮ゞ色くの人出京
の神主の。吉田で十八神道の免許ゞ。冠ゞ衣服
の紋付ゞ。ゞいなり。そゞなるべ。又十三次の道
乗ゞ。成ゞ京ゞ庶ゞ火消の者ゞ持の仲間ゞ。
三次々ゞ庶の習ゞとの。程ゞ礼儀礼のゞとゞ。

納屋下礼ゞ。ゞゞ紋とゞ庶ゞなゞくゞ。ゞゞ麻痺の痛のゞ足ゞ。ゞゞなゞ。
甲斐ゞ紋金ゞゞゞ長ゞゞ。ゞ中の老人ゞ
足ゞて。古方ゞゞ小巻ゞ。風呂ゞ
ゞ髮月代ゞ。ゞゞゞ。ゞゞゞ。
祝のゞゞ表ゞゞ。ゞゞゞ。ゞゞ
ゞゞゞ。ゞゞゞ。ゞゞゞ。
ゞゞゞ。ゞゞゞ。ゞゞゞ。

呂たりを。あい者の兵庫と。真実の世話ら。
たるとしの。清さまれだ。子牧女直路北て京白漬
ねとまを。杉ひあをうが。るいと。次吹竹の小口。瑞泉
塗て敷。下女が窮究たる白鷺作をの見に。〇を画
意然と然ぐ帰るよりの変女。三日とおとるとれが花
味が出く。与四郎小女良が夢見る女に。引上て傍。
元上てもを傍と居女に。ありて。持も被もをぐ
梅宇多里をくと孤